

---

## Short story 4

伶俐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Short story 4

### 【Nコード】

N4359P

### 【作者名】

伶俐

### 【あらすじ】

入社して5年目を迎えたOL、伊佐美香奈<sup>いさみ・かな</sup>。ただひたすら毎日仕事を必死にこなしてきたある日、先輩の女性社員に言われた一言にショックを受け、自分のこれからについて思い悩む。

そんなときに香奈を食事に誘ったのは営業部の男性、深沢幸人<sup>ふかさわ・ゆきと</sup>で・

飲み会に参加するのをやめたとき、ふと、ひとりの顔が頭をよぎった。

「じゃあ、また来週。」

そう言って去っていく同僚に、おつかれ、と返事をして香菜は自分の席に座った。

週末の金曜日、休みを前にして職場の雰囲気もちょっと変わる。

早めに仕事を切り上げて定時で退社し、いつもよりちょっと気合を入れたかわいい服装をして、街に出かける。

買い物したり、食事をしたり、デートしたり。

もちろん合コンという名の飲み会も含まれる。

今日は同僚から合コンに誘われていたのだが、どうしても気乗りがせず、体調が悪いという理由で断った。

ことさら体調が悪いわけではない。予定があるわけでもない。

本当に、ただの気分の問題だった。

というのは、3日前にある同僚に言われたひと言が原因だった。

『伊佐美は、この先何か考えてるの?』

この先ってどういうこと、と香菜は彼女に聞いた。

『この先の人生のことよ。ここの会社にいたってどうせわたしたち女性は今の雑用が続くだけで管理職まであがりっこない。あんた、何か資格とか持っているの?』

そう言って、1つ年上の彼女はふーっと煙草の煙を吐いた。

車の免許くらいですけど、と香菜は正直に答えた。

すると彼女は香菜を一瞥して、興味なさそうに視線を煙草に向けた。それが自分を馬鹿にしたように見えて、実際馬鹿にしているのだと思う、内心腹が立った。

『あたしは嫌よ。』

また、ふーつと長く煙を吐き出して彼女は言う。

『あたしはここに居る間に資格とって外資に転職して、キャリアアップする。あんたみたいに、平凡じゃ満足できない。』  
その言葉にかちんときて言い返そうと思った。

・・・が、言い返す言葉が何も無いことに気づいた。

自分は大学を卒業してこの会社に就職して、周りについていこうと必死になって仕事をしているうちに5年の歳月が流れた。  
別に向上心がないわけでもない。

ただ単に次から次へと現れる新しいことに対応しようとしているうちに月日が過ぎてきたから、今の会社をやめるなんていう発想が全くわかなかったのだ。

『ま、気楽でいいわね。そのうち結婚でもして仕事やめようってくらいなんでしょ。まああたしは仕事も恋愛も妥協する気はないけどね。』

そうやって彼女はぐりぐりと灰皿に煙草を押し付けて立ち上がり、ふ、と口元に勝ち誇った笑みを浮かべて悠然と去っていった。

はあ、と小さくため息をついてインターネットを開いた。

検索ボックスに『資格』と入れて、Enterキーを押す。

すると瞬時に『資格』に関するサイトが無数にリストアップされる。適当に開いてみるが、資格の種類もいろいろあって、いったい何に役立つのかもよくわからない。

文学部卒の香菜が持っている資格は本当に自動車の免許だけで、特殊な資格はゼロ。

ただしこれから何か資格をとるにしても、何かやりたいことがあるわけではない。

こんなんじゃない、いつかここでも仕事が続けられなくなるだろうか。いったい自分はどうして仕事をしているのか、そんなこともわから

ない自分が情けなくて、大きくため息をつきながらインターネットを閉じた。

もう今日は家に帰ろう。

そう思ってパソコンの電源が落ちたのを確認し、鞆を手に席を立つ。まだ残っている数人に声をかけて、会社を後にした。

「伊佐美。」

声を掛けられたのは会社を出てすぐのところだった。

「深沢さん。」

声を掛けてきたのは営業の深沢幸人。

「今帰りか。」

「はい。深沢さんは？」

「ちょうど外回りが終わったところ。10分待ってる、すぐ戻る。」  
「ぼん、とわたしの肩に軽く触れて、彼は急ぎ足で会社へ入っていった。」

（待ってる、って言ったよね。）

どうしたんだろう、と思つて会社のエントランスで待っていることにする。

本当は、自分の名前を呼ばれた瞬間、思い切り心臓が跳ねたのがわかった。

声でそれが誰だかわかったからだ。

そして、飲み会の出席を断るときに思い浮かんだ顔が、彼だったからだ。

どうして彼の顔が思い浮かんだのか。

理由はもちろんわかっていた。

深沢は香菜の3年先輩にあたる。

とはいえ、部署も違えば同じ会社でもほとんど接点はなく、今年に

入るまで言葉を交わしたこともなかった。ただ、顔だけはなんとなく覚えていた。

エレベーターや食堂で見かけていたので、同じ会社の人という認識だけは持っていたのだ。

言葉を交わすようになったのは偶然だった。

友人に誘われて飲みに出かけ、たまには雰囲気を変えようということとで連れて行かれたのがダーツバーだった。

見よう見まねで友人が放るように投げてみるが、的にささりもせず、ぼつりと下に落っこちる始末。

それでも面白くて続けていると、隣から、ストーンという気持ちのいい音が響いてきた。

ふと目を向けるとストーン、とダーツは的に吸い込まれた。

それを投げていたのが深沢だったのである。

顔をみてすぐに同じ会社の人、ということに気づいた。

同じ会社というだけでちょっと気まずくなり、特に問題があるわけでもないのだが、どうしようかと焦った。

しかもそのときの深沢の表情が不機嫌そうに見えたので、余計に何かまずいんじゃないだろうか、という気になったのだ。

それを打ち破ったのは彼のほうだった。

『同じ会社、だよな。』

『・・・はい。』

『ダーツは初めて?』

『・・・はい。』

綺麗なフォームで彼の右手を離れたダーツは、見事に的に中心に当たった。

よし、と言って彼は嬉しそうに笑った。

子供みたいに笑うんだ。

それが香菜の、そのときの深沢の印象だった。

## 1 (後書き)

順番が逆ですが、Short story 4を出すことにしました。

これは3部で完結の予定です。

「悪い、待たせた。」

そう言つて急ぎ足で深沢がエントランスに戻つてきたのはきつちり10分後だった。

「待つてませんよ、ぴったりです。」

そう言つと、それならよかった、と表情を緩めた。

「じゃ、いくぞ。」

そう言つて深沢は歩き始める。

「行くぞつて、どこ行くんですか？」

「そんなのメシに決まってるだろ。」

当たり前、とでも言わんばかりの彼に啞然としながらも、香菜はあとをついていった。

どういふつもりなんだろう、と香菜は思いながら、行き先も告げずに歩いていく深沢の隣を歩いた。

ダーツバーで最初に会つてから、その後もそのダーツバーや飲みに出かけた先で一緒になって、話したことはあつた。

しかし、会社を一緒に出でご飯を食べに行くということは今までになかつたのである。

会社を出て駅に向かい、3駅ほど乗つて下車し、駅のすぐ近くの店に入つていく。

香菜にとつては初めて入る店だ。

どうやらレストランバーのようで、奥にバーカウンターとピアノ、手前にはテーブル席が並んでいる。

どうやら彼は予約をしていたらしい。

彼が深沢です、と名前を告げるとウェイターはテーブル席をすり抜けて、2人を店の奥へと案内する。

するとそこは、表からは見えない個室のようにつくりの部屋になっていた。

「よくこんな素敵なとこ知ってますね。」

「まあ、な。」

彼は言いながら着ていた背広を脱いだ。

「飲み物はどうしますか？」

「赤、かな。」

「じゃあわたしも赤にします。」

深沢はアルコール類全般何でも飲むようだ。

飲むペースもかなり速いのに全く酔わない。

香菜自身もそんなに弱くないとは思うが、彼についていける気は全くない。

ふと、彼を見る。

いつだったか、誰かが言っていた。

『深沢さんっていつも仏頂面じゃない？あんまりしゃべらないし、なんか怖いよね。』

確かに仏頂面に見える、と思う。

けれど彼と話すようになってわかったことがある。

彼は自分のフィールドの話になると、目つきが変わる。生き生きと話す。

彼は全くしゃべらないわけではない。

それどころか、おそらく会社の人間が見たら驚くぐらいにはよくしゃべる。

ちゃんと聞く姿勢を見せると彼はしゃべってくれるし、よく笑顔を見せる。

こちらの話も最後までよく聞いてくれる。

その気配りのうまさは営業の人なんだなあと思う。

人間見かけじゃわからない、とよく言うけど、まさしく彼がそうだ。

ワインと前菜が運ばれてきてひとくちワインに口をつけたところで、  
気になっていたことを切り出した。

「今日はどうしたんですか、いきなり。」

「まあ、な。」

なんとなく、歯切れの悪い返事だ。

「何かあったんですか？」

「たまたま伊佐美をみかけたから。」

「でも深沢さん、この店予約してたんでしょ。」

「・・・いや、」

答え方がさらに歯切れが悪い。

視線を逸らしたように見えたのだが、おそらく触れてほしくないということだろう。

（彼女と来る予定だったのかな）

それでドタキャンされてしょうがなく、偶然居合わせたわたしを誘ったってことだろうか。

でも彼女を差し置いて別の女性と食事したらますます彼女が怒るんじゃないだろうか。

それでもいいやっていうくらい大喧嘩して落ち込んでいるんだろうか。

なんにしろ彼が飲みたい気分なのならできる範囲で付き合おう、と香菜は思った。

元気になって、また笑ってくれたらいい。

彼女と仲直りしたら・・・やっぱりちょっと悲しいけど、それでもたまに見せるあの笑顔をなくして欲しくない。

「仕事は忙しいですか？」

「いや、そうでもない。ひと段落ついたところだからな。」

そっぴいながら彼はメインの魚を綺麗に切り分けて口に運んだ。

彼の手は綺麗だと思う。

大きくて、指も長い。

前髪に触れる、書類にサインをする、ワイングラスを持ち上げる。どんな動作をするときもその指に目がいつてしまう。

そして彼は気まぐれに、その綺麗な手でぽんとわたしに触れる。

先ほど肩に触れたように。

彼の手が自分の体に触れると、甘い疼きで満たされるような気がする。

「どうした？」

わたしの手が止まっていることに気づいたのか、深沢がこちらを見つめた。

「いえ、綺麗に食べるなあと思って。」

思いついたことを素直に口に出した。

「・・・そうか？」

言った彼は、ちょっと照れているように見えた。

「深沢さんは、営業の仕事好きですか？」

デザートのジェラートが来たところで、ふと彼に尋ねてみる。

なんとなく、彼の意見を聞いてみたくなったのだ。

彼がどういうスタンスで仕事をしているのか。

「好きかどうか、ね・・・あんまりそんなふうに考えて仕事したことはないからな。」

彼は首を横にひねった。

「この会社に入って営業に配属されてずっとこの仕事だからな、好き嫌いを考えてる場合じゃなくてただやるしかなかったってだけだよ。でもまあなんとか続けてるわけだから、死ぬほど嫌いっていうわけじゃないことだけは確かだな。」

なんだか彼のその言い方は、香菜をひどく安心させた。

必ずしもみんながみんなやりがいを感じて好きな仕事を一直線にや

っているわけではないんだ、と。

「伊佐美、なんかあったか？」

「えっ？」

見ると、深沢が怪訝そうにこちらを見ている。

「ここ2、3日元気ないだろ。だから。」

うそ、と喉元まで出かかった言葉をかろうじて飲み込んだ。

まさか彼が気づいているとは思わなかった。

「俺も時間あるし、たまにはメシ食いながらのほうが話しやすいだろ。」

彼が言った言葉に、一瞬思考が停止した。

「もしかして今日、そのためにここに……。」

わたしが言うと、彼がしまった、という顔をした。

「……だから早く話せ。」

言い方は限りなくぶっきらぼうだが、言葉は限りなく優しく響いた。

わたしはぼつぼつと、3日前に言われたことを話した。

自分のスキルアップなんて考えもしなかったけれど、ちゃんと目標を立てて資格をとったりしたほうがいいのか、情けないことに先のことは何も考えてないことに気づいた、と。

彼はちゃんと、わたしが話し終わるまで静かに聞いてくれた。

「確かに彼女の言うことも一理あつたんです。確かに、そろそろ人生設計も考えなきゃいけないんです。でも、このまま一生この会社にいるかどうかもわからないけど、結婚してやめるかどうかも今の段階ではわからないんです。自分がどうしたいのか、何もわからない。それって、やっぱりだめですよね……。」

口に出すと余計情けなく思えて、ずんつと気分が重くなった。うつむいてテーブルを見つめる。

と、ぽん、と頭の上に何かのつた感触がした。

そのまま撫でられて、彼の手だということに気づく。

あつたかくて大きくて、嬉しくてどこか安心する。

でも妹にされてるみたいで、すごく、すごく胸が切なくなった。

それでもその手を離さないでほしいと願うわたしがいる。

「伊佐美、ほかと比べる必要はない。」

「……」

「人の生き方は人それぞれだ。満足の仕方もあるそれぞれ。」

「……」

「伊佐美はこの5年一生懸命仕事してきたんだろ。それこそ、転職なんて考えつかないほどに。」

「……はい。」

「俺も、ほかの誰も、伊佐美が妥協してるなんて思っただけ。むしろ

る向上心があったからこそここまで頑張ってきてるんだと俺は思う。

「……ありがとうございます。」

「まあ俺も偉そうなこと言えないけど、焦る必要はない。もし伊佐美がやりたいことを見つけたら、そのときは資格を取るなりなんなりして別の道を進めばいい。でもそれまではこのまま進んでみてもいいんじゃないか？もしかしたらこの会社でやりたいことを見出す可能性もあるんだ。だから、ゆっくり決めればいい。」

その言葉に、一気に涙腺が決壊してしまった。

ぽつり、ぽつりと涙が流れ、止めようとしても止められなくて、次々にテーブルの上に落ちていく。

「伊佐美、」

涙に気づいたんだろう。心配そうな声がかかる。

「悪い、なんかきつい言い方したか。」

「ちが、」

涙声でうまく言えなくて、懸命に首を左右に振る。

そうじゃなくて、あなたの言葉が嬉しかったから。

ありがとう、心配しないでいいから。言いたいのに、言えない。

頭の上に置かれた手が位置を変えて後頭部に周り、くいつと前にひかれる。

こつん、と頭がなにかに押し付けられた。

「もう少しきちんと泣け。」

その声はわたしの頭が押し付けられた場所から響いてきた。

そしてああ、彼の胸だ、と理解したら余計に何か安心して涙が出てきた。

「すみません、こんなに泣いてしまつて。」

5分くらいだったと思う。

とりあえずは泣き止んだ様子を察して彼はそっと香菜を離して顔を覗いた。

「たまには泣いたほうがいい。」

そう言った彼の顔は優しく、また涙が出そうになる。

「あんまり優しくされるとまた涙が出ます。」

「それなら涙が枯れるまで優しくするから我慢するな。」

そんな台詞が彼から出てくるとは思わなくて、びっくりして涙が引つ込んだ。

どうやら言った本人も恥ずかしかつたのか、目をそらしたのを見てちよっとおかしくなった。

こうやって器用なところと案外不器用なところが同居している彼のことかいつの間にか好きになっている。

その彼のそばにいるのが自分ではないだろうことは残念だけど、今日のことはずっと忘れないだろうと思う。

「深沢さん、ありがとうございます。」

おそらくは涙でぐしゃぐしゃな顔で、一応笑顔を作りながら言っただけ。

一瞬、彼が切ない表情をした。

それから一息吸って、ぴたりと真剣なまなざしでこちらを見つめた。見つめられて、どきり、と心臓が跳ねた。

「伊佐美。」

「・・・はい。」

「もう少し、気を抜いてくれないだろうか。」

「気を抜く、ですか。」

「俺の前ではもう少し気を抜いてほしい。」

「・・・深沢さん？」

がしがし、と頭をこすって、深沢が唸る。

「そうじゃない、俺の前だけではもつと気を抜いて欲しい。」

「えっ？」

「俺は、伊佐美と一緒にいると気を抜ける。自分らしくいられる。だからそれと同じように、お前にとっても俺がそういう存在であってほしい。」

「・・・」

「好きなんだ。」

深沢の言葉を聞いた瞬間、今まで悩んでいたことや泣いていたことが全て、頭からふつとんだ。突然のことに驚いた、というのが本音で、驚きすぎて思考が停止したのだ。

「・・・伊佐美？」

反応がないのを心配したのか声がかかって、我に返る。まだ混乱したままの頭で、かろうじて香菜は言葉を紡いだ。

「え、つと・・・今だつてこうして深沢さんに甘えています。気を抜いたらますます深沢さんに甘えてしまいそうです・・・。」

言い終わった瞬間、何を言ってるんだろう、と思いあたふたする。もちろん、そこに自分の想いがこぼれてしまっているなんて気づきもせずに。

「伊佐美なら、どれだけ甘えてきても構わない。」

真剣なまなざしがゆるみ、彼の目尻がゆるやかに下がる。そんなに優しくして熱のある視線を受けて、顔が赤くならないはずがない。

テーブルの下で両手をぎゅっと握り合わせ、視線を落とした。

「答えを急ぐつもりはない。けれど、今のところ、少なくとも俺を嫌いではないか？」

うかがうように、心配そうに彼の声が響く。

嫌いではないか、なんてまるで自嘲するような台詞を言わせてしまっうなんて。

わたしの答えは最初から決まっているのに。

こうして一緒に時を過ごしたいのも、甘えたい人も、ただひとりだけ。

それは、今、伝えないといけない。

うるさく鳴る心臓に落ち着けと命令するように、何度も何度も息を深く吸う。

よりいっそう強く手を握り締めて目を閉じ、心を決めて目をあけて顔を上げると、どこか緊張した面持ちの深沢がこちらを見ていた。

「嫌いではないです。」

なんとか絞り出した声は小さかったけれど、彼には届いたようで、目に見えて彼の顔に安堵が広がった。

「それに、わたしが甘えたいのは、ひとりしかいません。」

そう言うと、安堵した深沢の顔がまた引き締まる。

「深沢さん。」

「なんだ。」

しっかり、彼の目を見る。

「あなた意外に、甘えたいと思う人なんていません。」

そう言うと。

深沢の表情がまるで信じられないとでもいうように茫然としたものになった。

「ほんとか・・・？」

気持ちを伝えることに全精力を使い果たした香菜は、こくん、とうなずくのもう精一杯で。

でもうなずいた瞬間、ふたたび香菜は彼の胸の中にいた。

胸の中から見上げた深沢の顔はきらきらした笑顔で、それを目にした香菜は、ああ、彼のこの笑顔に落ちたんだな、と思った。

### 3 (後書き)

今回は、あんまり腹黒な男性ではありません(笑)。

最初に書いた時の「話の終わり方」がすっかりこなくて、書きなすのにずいぶん時間がかかってしまいました。  
読んでいただいてありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4359p/>

---

Short story 4

2010年12月18日18時57分発行